

「サーペント・ハンドラーズ」(Serpent Handlers) について

池田 智



Photo: Andrea Perkins, Steve Shelton

はじめに

私には、アメリカ滞在中どんなに忙しくても、実行することが一つある。「チャーチ・イクスプロアリング」(church exploring)である。

この表現を知ったのは、アメリカ中西部の広大なトウモロコシ畑と大豆畑に囲まれた大学町にいたときのことだった。意味は文字通り「教会探検・調査」。つまり、自分が毎週日曜日に通うことになるだろう教会を決めるにあたって、どの教会が自分に最もふさわしいかを調べに、あちこちの教会の礼拝に出席することである。

アメリカの多くの大学、しかも総合大学の場合、全米はもとより世界各国から学生が集まってくる。これから始まる学生生活を送っていく上で最も重要なことは、もちろん「履修登録」(registration)を無事済ませることだ。科目に

よっては人数制限が設けられているため、人気のある科目、人気のある教授の授業は誰よりも早く登録しなければならない。しかし、それは誰もがする、いやしなければならないことだが、多くの日本人留学生にとっては関係なくても現地の学生やヨーロッパ、その他宗教を重んじる国々からやってきている学生がしなければならない大切なことの一つが、church exploringなのである。もっともイスラム教徒やシク教徒、あるいはユダヤ教徒などはこの類の経験をすることは少ない。なぜなら彼らが必要とするモスクにしても、グルドワラーやシナゴークにしても、一つの大学町にそうした施設が複数あることはまずないため、自分たちが安息日を過ごす場所は自ずと決まってしまうからだ。したがって、church exploringはもっぱらキリスト教徒、それもプロテスタントに適應される表現である。

プロテスタントは16世紀の宗教改革によって登場するわけだが、教義上の違いから英国やヨーロッパにおいてさまざまな教派が登場した。しかし、その多くはアメリカに移植されて初めて開花するに至ったものが多い。多いどころか、アメリカで生まれる教派も多く、これがアメリカの宗教文化の特徴、すなわち「教派主義」(denominationalism)となった。そのため、まずは自分が所属する教派の教会を見つけなければならない。該当教派の教会が一つしかなければ、多くの学生はそこへ参加することになるだろう。しかし、複数ある場合には、教会によって牧師の気質も違うだろうし、教会員の年齢構成や彼らの社会・経済的背景も、自分に合うものかどうか調べなければならない。毎週通う場所、しかも多くのアメリカ人にとって、人生におけるさまざまな問題を解決する上で重要な役割を果たす場所だけに、どの教会の教会員になるかはとても大切な問題なのである。だからこそchurch exploringが行われるのだろう。

教派に拘らない場合もある。これもまたアメリカならではの、と言って良いのかもしれない。プロテスタントの教会であれば、エピスコパリアニズム(監督派)だろうとメソディスティズム(メソディスト派)だろうとどちらでも構わない。礼拝のあり方が自分に合う、と思えば、いずれかに参加することになると思われる。現大統領、ジョージ・W・ブッシュは、父親のジョージ・H・W・ブッシュと同じ教派、すなわちエピスコパリアニズムであったが、ローラ夫人と結婚するとともにメソディスト派へ改宗したのである。第二次世界大戦後の大統領アイゼンハワーは「エホヴァの証人」から「プレズビテリアン」(長老派)へ、ロナルド・レーガンは大統領在任中は「キリストの弟子たち」

(Disciples of Christ)派だったが、その任を終えると「プレズビテリアン」へ改宗したことは、よく知られていることである。もっとも教派を変えたことを改宗と言ってよいのかどうかは定かではない。ともかく教派間を移動することは珍しいことではない。おそらくその理由は、ブッシュのように結婚相手の教派に合わせるというのも一つの理由だろうが、社会学者リチャード・T・シェイファー(Richard T. Schaefer)がその著『人種と民族集団』(*Race and Ethnic Groups*)で明らかにしているように、所属する宗教、教派によって平均的な学歴や収入が分かってしまうからだ、と考えるのもあながちあてにならないとは言いきれない。

20世紀初頭にマックレイカーとしての地位を築き上げた作家アプトン・シンクレアは、少年の頃、メソディスト派の母親に連れられて行った教会はメソディスト派ではなく監督派の教会であった。シンクレア家は、その時既に没落名家になりはてていたが、母親にはそれが堪えられなかったのかもしれない。シェイファーの調査によれば、プロテスタントの教派中もっとも学歴が長く、収入が高いのは監督派なのである。

その意味合いで教派間を移動することもあるだろうし、アメリカの多くの教会が礼拝後に行っているレセプションやレクリエーションに参加する人たちと波長が合えば、教派を越えた価値をそこに見いだすのもアメリカ的なのである。アメリカにおける教会の役割は礼拝や結婚式を行うだけでなく、いわゆるコミュニティ・センターとしての役割も大いに果たしているのである。筆者が個人的にしばらく通った教会では、若い人たちから中年に至るまで独身男女がグループ・デートをする機会を毎週提供していた。これなら恋愛関係を経て結婚をすることになったときも、お互いの宗教や教派のことでもめることはまずない。そこには親の安心感すら見てとれたように感じた。

このchurch exploringに私がなぜかわるかと言えば、これによってさまざまな教派の特徴を知ることができるからである。これだけは本を読んだだけではまず知り得ないことが多々あるため、止めることはできない。

私の今までの経験では、アフリカ系アメリカ人だけの教会とかハイチ系アメリカ人だけの教会といった単独人種の教会とか、その他いわゆるカルト系とレッテルが貼られている教会以外は、突然礼拝に参加してもまず断られることはない。むしろ礼拝後のレセプションで歓迎されることが多い。これは*Encyclopedia of American Religion*のような事典で紹介されるときに会員数ま

で掲載されるからかもしれない。

教会のなかには、日曜日の礼拝以外にホームチャーチを行うことを積極的に展開してる教会もある。礼拝後のレセプションでこうした集まりに誘われることがある。私がよく顔を出していたNew Covenant Fellowshipという保守派プロテスタント集団などは、ホームチャーチはもちろん「朝の祈り」を、「昼の祈り」を、「夕べの祈り」を、と誘い合っては、キャンパスの片隅に、空いている教室に、あるいは学生会館や寮のレセプション・ルームに集まっては手をつなぎあったり、肩を組み合わせたりして、それぞれが抱えている問題を吐露し、祈り合う人たちがいた。

私の目には、どう見ても情緒性の高い人たちとしか表現のしようがない人々のように思えた。その多くの人たちはアメリカの冷徹な競争原理の社会を容認できず、むしろ暖かな手を差し伸べあいながら一日一日を生きていこうとしているようだったし、むしろ時間がゆるやかに過ぎていく田園地域での生活によく馴染む人たちのように思えた。また、そうした人たちが集まる教会で見かける光景は、牧師と会衆とが「コール・アンド・レスポンス」(Call and response)を行い、「主」とか「イエス」とかいった言葉が聞こえると掌を天高く上げ、あたかも「昇天」を思わせる姿で立ち上がったたり、座席を離れて体を揺らしたり、踊ったりする姿である。なかにはいわゆる「トランス」状態になって床に倒れたりする人まで現れることがある。今、ここに述べているのは大学町でのことで、1920年代にジャーナリストのH・L・メンケンが「バイブル・ベルト」(Bible Belt：キリスト教篤信地帯)とレッテルを貼った地域のことではない。しかし、大学町とは言え、中西部の大学町のことである。

アメリカ中西部は、その宗教性においては南部について保守的である。現大統領ブッシュが勝利を収められたのもオハイオ州の、ある小さな町での票集めに勝利したからだと言えられたように、中西部、しかもその農村地帯はその職業ゆえに保守的なのである。それが南部、しかも外界からは隔絶された地域、つまりアパラチア山脈に呑み込まれた地域となると、その保守性は更に深まることだろう。したがって、そこに住む人たちの多くが「福音根本派」(evangelical fundamentalist)と呼ばれるキリスト教プロテスタントとなる。彼らの最大の特徴と言えば、それは聖書を字義通りに読むことである。

アパラチア(Appalachia)の保守性

アパラチアとは、通常、北はカナダと国境を接するメイン州から南はアラバマ州にいたるおよそ1500マイル、すなわち2400キロにわたる地域だが、本稿では南部アパラチア、すなわちケンタッキー州の東部、オハイオ州東南部、ウェストヴァージニア、ヴァージニア、ノースカロライナ、サウスカロライナ、ジョージア、アラバマ、ミシシッピ、テネシーの各州が大なり小なりアパラチア山脈にかかる州を意識する。その理由は、本稿で取り上げる「サーペント・ハンドラー」(serpent handler)とか「スネイク・ハンドラー」(snake handler)と呼ばれる人たちが活躍する場がそこだからだ。

南部アパラチア地域のなかでも、ウェストヴァージニア州は完全にアパラチア山脈のなかに包み込まれている。それだけにあらゆる意味で保守的である。一つの例が「ケイティ・シエラ停学事件」だ。

これは、2001年9月11日に起こされた同時多発テロ後に、アメリカがアフガニスタンを空爆したときに起こった。

ウェストヴァージニア州チャールストン(Charleston)のシソンヴィル高等学校(Sissonville High School)の生徒ケイティ・シエラ(Katie Sierra, 15歳)が、空爆に反対するTシャツを着て登校し、「アナーキスト・クラブ」を設立する行動に出たため、停学処分を受けると同時に、同級生からのいじめにあった。その結果退学を余儀なくされた、という事件である。

アナーキストという言葉だけを捉えると、暴力による政府転覆といった印象を与えるが、高等学校1年生のケイティの目的はあらゆる憎悪と暴力とを否定する、という意味でのアナーキストだったのである。また、ケイティが着用したTシャツには、アメリカ人であれば誰もが知っている「忠誠の誓い」をパロディ化したものが書かれていた。曰く、“I pledge the grievance to the flag Of the United States of America And to the Republicans whom I can't stand...” すなわち「私は我慢のならないアメリカ合衆国の国旗及び共和党員に苦情を誓います…」というもので、まさしく、アメリカ人であれば誰もが小学校のときからずっと国旗に向かって毎朝唱えさせられている“I pledge allegiance to the flag of the United States of America, and to the Republic for which it stands...”「私はアメリカ合衆国の国旗とそれが象徴する共和国に忠誠を誓います…」をもじったものであった。

ケイティがアメリカ合衆国政府の政策にケチをつけるため、愛国心を極限にまで高めていく上で非常に役にたっている「忠誠の誓い」をパロディ化したことに、校長以下シソンヴィルの先生や生徒が怒り心頭に発したのであろう。そこには、アメリカ人が最も大切に、またそれがなければ彼らの人生は送っていかれないとまで評価される憲法修正第一条の精神はない。それほどまでに保守的であり因襲に囚われた文化があるのだ。南部アパラチア人の特徴に家族の結束をあげることがある。それゆえ目上の者が「こう」と言えば、案外それについて行く者がいる傾向は濃いかもしれない。

チャールストンはウェストヴァージニア州の州都で、人口は53,000人を越えるが、シソンヴィルはチャールストンからインターステイト77号を北へ10マイルほど行った山間の人口4,000人足らずの田舎町で、しかもその人口構成は非ヒスパニック系白人98.2%、先住民0.6%、その他1.1%、残り0.1%は不詳といった、もっぱらヒスパニック系を除く白人だけの構成である。しかも、人口動態率が低いため、保守化・因襲化の率は高くなるのも必然のことと言えるかも知れない。

アパラチアにかかる地域の住民の多くは石炭産業か林業にかかわってきた。しかもいずれの産業も自営ではなかったため低賃金で働かされ、石油が出るようになると失業者が次々と輩出されるようになった。その時にはすでにアパラチアを抜け出して西部へ移住するには時期を失し、結局はその地に留まらなければならない状況であった。その結果、いわゆるプア・ホワイト(poor white：貧しい白人)と呼ばれるようになる貧困階級が増加し、1964年、リンドン・B・ジョンソン大統領が、貧しい炭鉱町の今にも倒壊しそうな家のポーチからその実情を話したことで、全米にもっとも貧困な地域として知られるようになったのである。この時、ジョンソン大統領は「貧困との戦争」(War on Poverty)を打ち出している。その結果、ケンタッキー州ランカスター(Lancaster)には「クリスチャン・アパラチア・プロジェクト」が設立され、山岳地帯の人たちを貧困から抜け出させるためのプログラムを展開し始めた。このプロジェクトは、今日まで続いている。多くの人たちがアパラチア南部山岳地帯の人を「ヒック」(hick)とか「レッドネック」(redneck)とか「ヒルビリー」(hillbilly)とか侮蔑的な呼び方をすることがあるが、結局は貧困のために教育も満足に受けられないため、そうした呼び方をされてしまっているのである。

しかし、みんながみんなそうした状況に甘んじているわけではない。1999年にリリースされた映画『遠い空の向こうに』(*October Sky*)に描かれた少年ホーマー・ヒッカム(Homer Hickam)のように、絶対的権力を持つ父親に反抗してまで大学進学を希望し、最終的にはそれぞれ人口わずか900人足らずの山村から抜け出してNASAに職を得るまでになった人物もいるのだ。そのわずか900人足らずの人口しか抱えていないかつての炭鉱町コールウッド(Coalwood)は今や、ホーマー少年のお陰でOctober Sky Festivalまで催すようになっている。だが、そのコールウッドからわずか10マイルほどしか離れていない村、ジョロ(Jolo)こそ本稿で取り上げる「サーペント・ハンドラー」が直接かかわる村なのである。

サーペント・ハンドラーとは？

アメリカのキリスト教プロテスタントの一教派に、猛毒をその牙に持つというガラガラヘビやカパーヘッド(copperhead)、あるいはウォーター／カトゥンマウス・モカシン(water/cottonmouth moccasin)と呼ばれるマムシなどの「毒蛇」(serpent)を扱う人がいる教派があることを知ったのは、『フォックス・ファイア』(*Foxfire*)という、いわばアパラチア山脈地域文化事典をバラバラ広い読みしているときであった。その毒蛇を礼拝中に「取り上げる」人が「サーペント・ハンドラー」で、「スネイク・ハンドラー」とも呼ばれている。彼らが猛毒をもつヘビを取り上げるのは、新約聖書の「マルコによる福音書」第16章18節に、“In my name shall they cast out devils; they shall speak with new tongues; they shall take up serpents; and if they drink any deadly thing, it shall not hurt them; they shall lay hands on the sick, and they shall recover.”「彼らはわたしの名で悪霊を追い出し、新しい言葉を語り、ヘビを取り上げるであろう。また、毒を飲んでも、決して害を受けない。病人に手をおけば、いやされる」と記されているからである。したがって礼拝中に精神が高揚し、聖霊と一体化すると、ヘビを取り上げ「異言」を発したりする。またヘビが冬眠する時期になると、中枢神経を冒し死に至るほどの猛毒、ストリキニーネに灰汁と水を加えた「救いのカクテル」(salvation cocktail)¹と呼ばれるものを飲み干すのである。

彼らは仮にヘビに咬まれても血清を打つことを拒み、自然治癒を待つ。スト

リキニーネを飲んで昏睡状態になっても医者に運ばれることを拒む。ひたすら聖書の文言を信じ、死に至れば、それは神の思し召しと受けとめるのである。

*Foxfire*はアパラチア山脈一帯の言語・文化を知る上で、実に貴重な書籍である。その第7巻目はアパラチア山脈にかかる地域の宗教でまとめられている。南部アパラチアは、現代はともかく7巻目が上梓された1973年頃では、もっぱらキリスト教プロテスタントで占められていて、ローマカトリックについては、104ページから109ページと、わずか6ページしか与えられていない。しかも、その冒頭に記されていることは、「アパラチアでは比較的新しい教派だが、着実にその会員数を増やしている。例えば、レイバン郡ではここ20年の間に数名から数百人に増えた。…… 大方、新しくこの地域にやって来た人たちである」(傍点筆者)といった説明である。目次を眺めると‘The People who Take up Serpents’という項目がある。「ヘビ(毒蛇)を取り上げる人」だ。370ページから428ページまで、すなわち58ページをこれに割いているのである。総ページ数483ページの14%。その他に付録として‘Snake Handlers’という表題のコラムに3ページが与えられている。つまり、南部アパラチア地域におけるキリスト教プロテスタントの一教派として見落とされてはならない教派であることの証である。

しかし、「サーペント・ハンドラー」は教派名ではない。アパラチア南部に住む人たちは、そのほとんどがプロテスタントで、バプティスト派、プレズビテリアン派、ルーセラン派、エピスコパル派、メソヂスト派、ナザレ派、神の教会派などに所属している。こうした教派のなかでホーリネス派とペンテコスタル派運動(Holiness and Pentecostal Movement)の流れを汲む「神の教会派」(Church of God)系の教派、なかでもChurch of God with Signs Following「しるしが伴う神の教会」が「サーペント・ハンドラー」の活躍の舞台である。

「しるしが伴う」とは、新約聖書の「マルコによる福音書」第16章17節の“*And these signs shall follow them that believe;*”「信じる者には次のようなしるしが伴う」に因む名称である。

歴史

19世紀初頭の第二次大覚醒(Second Great Awakening)運動の最中、メソヂ

イスト派が元来重視していたキリスト教徒「完全浄化」(“entire sanctification”)を回復することを目的としてホーリネス派運動が起こった。

1843年にニューヨーク州北部のユティカ(Utica)に設立された「ウェスリー系メソヂスト教会」(Wesleyan Methodist Church)や、やはりニューヨーク州西部のピーキン(Pekin)に、1860年、設立された「自由メソヂスト教会」(Free Methodist Church)などがその代表的な結果である。それぞれの特色は、前者は「福音主義」(Evangelicalism)を信奉することであり、後者は質素な生活を重視し、聖化・将来の報いと罰に対する信仰を強調することである。

このホーリネス派運動の流れから、1901年にペンテコステ派運動がキャンザス州トピーカ(Topeka)のベテル聖書学校(Bethel Bible College)から始まるのである。この運動では、聖霊の直接の感応を説き、異言(glossolalia)や神による治癒を重んじることが積極的に説かれた。このペンテコステ派運動によって300以上の教派が生まれた。そのほとんどはわずかな数の教会員しか集められなかったが、なかには、1907年にテネシー州クリーヴランド(Cleveland)に設立された「しるしを伴うドリー・ポンド・神の教会」(The Dolley Pond Church of God With Signs Following)のようなしっかりした教会もあった。

このテネシー州クリーヴランドの「神の教会」こそ、初めて「毒蛇を取り上げた」教会である。それは1909年⁹²、もともと密造酒を造っていたジョージ・ウェント・ヘンスリー(George Went Hensely, 1880-1955)によって行われたと考えられている⁹³。

ヘンスリーが熱心に説教をしていると、ガラガラヘビを入れた箱が持ち出されたのである。その箱を持ち出した人たちがヘンスリーの説教に納得できずにそうしたのか、飽きてしまってそうしたのかは不明だが、ヘンスリーはその箱から3フィートもあるガラガラヘビを取りだし、説教を続け、既に引いた新約聖書の「マルコによる福音書」の第16章17節から18節を引用して、自分の後に従うように勧めたのである。

この話はあつという間に近隣の教会に広まり、「蛇を取り上げる」者が次々と現れるようになったが、1920年代末には一時下火になった。だが1929年の株価大暴落がきっかけで起こった大恐慌下の1930年代から40年代にかけて、先に上げたドリー・ポンド・神の教会のレイモンド・ハリス(Raymond Harris)やトム・ハードゥン(Tom Harden)らによって再び南部アパラチア一帯で盛んになった⁹⁴。が、ドリー・ポンドに所属していたルイス・フォード

(Lewis Ford)が蛇に咬まれて1945年に亡くなると、その2年後の1947年にテネシー州は「サーペント・ハンドリング」を法律で禁止した。

ヘンスリーも活躍していたが、同法によってチャタヌーガ(Chattanooga)で逮捕されると、この法律の正当性についての議論が高まっていった。

正当性とは信仰に基づく宗教心の高まりのなかで毒蛇を扱うことを禁じるのは「信教の自由」が冒されているのではないか、というものであった。現在では既に述べたように、州によって法律が異なるし、法律があるからといって、密に行われるこの儀式を警察が徹底的に取り締まれるわけでもないのが実情のようである。

だがノースカロライナ州も1947年に法律で禁止。その後、こうした法律上の影響のためか、1970年代に入るまで話題に上らなくなった。その間、この儀式を創始したヘンスリーが、1955年7月24日、フロリダ州カルフーン郡(Calhoun County)の、その時には既に廃屋になっていた鍛冶屋を教会代わりに礼拝を行っている時に、取り上げた蛇に咬まれたのが原因で他界している。この時、彼は3週間以上、ヘビを取り上げていなかったという。

「サーペント・ハンドラー」は咬まれても決して血清をうつことはせず、自然に任せるのである。記録によればヘンスリーはそれまでに400回以上咬まれても生き延びていたという⁵。彼らが咬まれた後、血清も打たずにいるのは、仮にそのとき死んでも、それは神が決めたことだと思ふからである。

ヘンスリーのように400回以上も咬まれて死ななかったのは、ヘビの牙を抜いてあるのではないかとか、毒を前もって抜いてあるのではないか、あるいは取り上げる予定のヘビには餌をたくさんあげて咬みつかないようにしてあるのではないかといった噂が広がることがあったようだが、そうしたことはないと言われている⁶。

1970年代に入って、「サーペント・ハンドリング」が話題になったのは、テネシー州とジョージア州で、三名がヘビに咬まれたり、「救いのカクテル」を飲んで他界したからであった。この時にも毒蛇を扱うことを禁止することと信教の自由との論争があったが、テネシー州最高裁判所は1973年にあらためて禁止を確認している。

しかし、実情では「サーペント・ハンドリング」は今なお行われていることが報告されている(McCauley and Porter, 2003, 12)。また、近年では、ヴァージニア州で発行されている『ロアノーク・タイムズ』紙(*The Roanoke Times*)の

2004年4月18日号に、ドウェイン・ロング牧師(Rev. Dwayne Long、45歳)が礼拝中にガラガラヘビに咬まれ、翌日死亡した記事が報道されている⁷⁾。私たちにしてみれば危険きわまりないことを、なぜ法律を無視してまで行うのだろうか？

「サーペント・ハンドラー」から返ってくる回答は、福音根本派(evangelical fundamentalism)、すなわちキリスト教原理主義者(Christian fundamentalist)のテキスト通りのもの、すなわち “We ought to obey God rather than men.” 「人間に従うよりは、神に従うべきである」(新約聖書「使徒行伝第5章29節」)である⁸⁾。だが、果たしてこれだけのことだろうか？ 筆者は、彼らが「使徒行伝」のこの言葉を実践し、また「マルコによる福音書」第16章17節、18節を信じてのみ「サーペント・ハンドリング」を行っているようには思えないのである。

なぜ「サーペント・ハンドリング」を行うのか？

福音根本主義者についての優等生的な回答をここするのであれば、既に引いたように「マルコによる福音書」第16章17節、18節に記されている5つの「しるし」の一つを実行しているにしか過ぎない。

その5つの「しるし」とは、「悪霊を追い出す」、「新しい言葉を語る」、「ヘビを取り上げる」、「毒をのむ」、それに「病人に手をおく」であり、その3番目の「しるし」を実行することによって、自らが「真の信者」(true believer)であることを、会衆の前で明らかにしているのである。その「真の信者」であることを明らかにするとはどのようなことだろうか？ ただ、単に「真の信者」であることを披瀝したければ、自らの命と引き換えにすることはない。「悪霊を追い出し」、「新しい言葉」すなわち「異言」(「コリント人への第一の手紙」第14章1節から40節)を語るようになるだけでもよいし、病を負っている人に「手を置く」だけでも済むではないか。それをなぜ敢えてガラガラヘビやカーヘッドなど猛毒をもつヘビを「取り上げる」のだろうか？

筆者は1980年代前半と1990年代前半にケンタッキー州pleasant Hill(Pleasant Hill)にあるシェイカー教徒のコミュニオン跡やベリア(Berea)にあるベリア大学を訪ねたことがあった。

インターステイト・ハイウェイを降りると途端に人影まばらどころか、人っ

子一人いない田舎道へ入る。小さな村にもビジネス・ディストリクト (Business District)の看板が見える。しかし、そこへ車を入れたところで人影が見えるわけではない。古ぼけた小さな教会堂、郵便用の私書箱を備えた建物、シェリフの事務所、日本でいう農協のような事務所、小さな食堂とか雑貨屋が見える程度。そんな村に住んでいる人たちは、まず村から遠くへ出ることはなさそうである。印象的に覚えている事件といえば、雑貨屋にあったアパラチア特有の玩具を買うためにトラベラーズチェックを遣うことになったときのことだ。身分証明書を見せろ、と中年の店主に言われた。パスポートを提示したが、これは何だ？ と説明を求められた。説明をしても納得してくれない。見たことがない、というのだ。

彼らの生活圏は、アーミッシュと同じで、自分の住まいを中心にせいぜい数マイルの範囲なのだろう。映画館などなかったし（造ったところで人口が少ないため経営が成り立たないだろう）、山間だからテレビもまともに映ることはないだろう。食堂へ入ったら黄色人種など見たこともないようで、そこにいた客全員の視線がこちらに向けられた。こちらとしては、緊張した顔の筋肉をむりやりほぐすように、ニッと微笑むしかなかった。筆者以外の男性は全員サスペンダーでズボンを吊っていて、髪は短く、こぎれいに刈っていた。また一方女性の髪は長く、暑い日だったが長袖を身につけていた。その姿から、きっとこの人たちが噂に聞いていた南部アパラチアのキリスト教原理主義者なのだろうと思った。全員がどう見ても白人。その表情やごつごつした指先から判断して、誰一人、高等教育を受けたという印象はなかった。聞こえてくる英語は、「サザンドロール」(southern drawl)と呼ばれる英語。この小さな村で互いのことを気遣いながら人生を終えていく人たち、という感じがあった。リンドン・B・ジョンソンがケネディ亡き後大統領職に就き、1964年に「貧困との戦い」を宣言した。ケンタッキー州の古ぼけ、ひしゃげた小屋(shack)のテラスから宣言する姿が全米に放映されて、「プアホワイト」が現実存在することが全米に知られた。私が目の前にしている人たちは、まさにその「プアホワイト」の印象があった。

貧困と失業とに翻弄され、耕す土地もない人たちにとって一体何が生き甲斐になるのだろうか？ 一体何に自らのアイデンティティを求めるのだろうか？ 彼らの多くは、週一回の礼拝だけでは満足しない。何かにつけて集まる教会堂での生活を軸にして人生が展開されているように思える。教会に集まる仲間

(brethren)の支えがあって初めて、彼らが抱える人生への不安感やストレスが解消されるのである。したがって週に二度三度教会に集まる。集まるたびに礼拝を行う。礼拝を行うたびに精神が高揚し、神との結びつきを感じる。感じることで「異言」を発し、また「へびを取り上げ」、あるいは「毒を飲む」者が現れる。彼らはこうしたことを互いに強要することはない。自らに聖霊が入ったと感じる者だけにそうした「しるし」が現れるのである。「しるし」の現れ方が、誰もが命と引き換えになる可能性を多分に秘めていることを知っている「へびを取り上げる」ことや「毒を飲む」ことであれば、「真の信者」としてまわりの者から一目置かれる存在になるだろう。それこそ彼にとって、生きていくことの証にほかならない。そこで仮に命をおとすことがあっても、それは神に求められたことで、それはそれで自ら納得してのことなのである。

ファンダメンタリストの多い教会の礼拝でよく見かける光景は、出席者のなかに「イエス」とか「主」といったことばで掌を天に向けて立ち上がる、体をゆらす、席から出て通路で踊り出す、わけのわからないことを口にする、といった興奮・恍惚状態になる人がいることだ。神との交信なのだろう。聖霊が入った瞬間なのだろう。その時、他の会衆にたいして「真の信者」たり得るのであり、「真の聖徒」たり得るのである。17世紀ピューリタンの世界に「聖徒」(saint)という存在があった。「回心体験」を語る(conversion narrative)ことができた人たちである。conversion narrativeをする能力がなければ、人に見える形でそれをしなければならぬ。それをすることによって初めてそこに自分が存在する証になるのだ。アパラチア南部の貧しい人たちにとって「へびを取り上げた」とき、「毒を飲む」ときこそconversion narrativeにほかならないと言えるのではないだろうか？ そのとき初めて生きていく証を示しているのである。それゆえ「サーペント・ハンドリング」は男性信者に限られているわけではないのである。

註

*1 Daugherty, Mary Lee. 'Serpent-Handling as Sacrament'

<http://theologytoday.ptsem.edu/oct1976/v33-3-article2.htm>

*2 Burton 1993, 151. *Foxfire*でも1909年としている。また、英国の新聞『ガーディアン』紙が2005年10月3日号で「なぜ私たちは神を信じるのか？」という特集記事を掲載したが、そこでも1909年としているので、「サーペ

ント・ハンドラー」の登場は1909年とすることが可能であろう。

- *3 アラバマ州及びジョージア州における「サーペント・ハンドリング」はヘンスリーにその起源があるのではなく、独自にジェイムズ・ミラーという男が1912年にアラバマ州サンド・マウンティンで始めたのが最初で、その後ジョージア州へミラー自身が持ちこんだという説もある。
- *4 <http://religiousmovements.lib.virginia.edu/nrms/Snakes.html>
- *5 Burton 1993, 57.
- *6 Kimbrough 2002, 34-36.
- *7 <http://www.rickcross.com/reference/snake/snake8.html>
- *8 Burton 1993. 85.

参考文献

- Brown, Fred and McDonald, Jeanne. (2000). *The Serpent Handlers: Three Families and Their Faith*. Winston-Salem: John F. Blair, Publisher.
- Burton, Thomas. (1993). *Serpent-Handling Believers*. Knoxville: The University of Tennessee Press.
- (2004). *The Serpent and the Spirit: Glenn Summerford's Story*. Knoxville: The University of Tennessee Press.
- Carroll, Bret E. (2000). *The Routledge Historical Atlas of Religion in America*. New York and London: Routledge.
- Covington, Dennis. (1995). *Salvation on Sand Mountain: Snake Handling and Redemption in Southern Appalachia*. New York: Penguin Books USA Inc.
- Daugherty, Mary Lee. (1976). 'Serpent-Handling as Sacrament'
<http://theologytoday.ptsem.edu/oct1976/>
- Ennis, D. L. (Aug. 5, 2006). 'Appalachian Snake Handling — A Ritual of Faith' in *The American Chronicle*.
- Gillespie, Paul F.(ed.) (1982, first printed 1973). *Foxfire 7*. Garden City: Anchor Press/Doubleday
- Kimbrough, David. (2002). *Taking Up Serpents: Snake Handlers of Eastern Kentucky*. Macon: Mercer University Press.
- McCauley, Deborah Vansau. 1995). *Appalachian Mountain Religion: A*

- History*. Urbana and Chicago: University of Illinois Press.
- McCauley, Deborah Vansau & Porter, Laura E with Patricia Parker Brunner. photographs by Warren E. Brunner. (2003). *Mountain Holiness: a photograph narrative*. Knoxville: The University of Tennessee Press.
- Melton, J. Gordon. (1999). *Encyclopedia of American Religions*. 6th Edition. Detroit: Gale.
- Morrow, Jimmy with Hood, Ralph W. Jr. (eds.). *Handling Serpents: Pastor Jimmy Morrow's Narrative History of His Appalachian Jesus' Name Tradition*. Macon: Mercer University Press.
- Perkins, Andrea. Taking Up Serpents. <http://www.costnews.com/bizarre/serpents/serpents.htm>
- Schaefer, Richard T. (1996). *Race and Ethnic Groups*. New York: Harpercollins.
- Schwartz, Scott. (1999). *Faith, Serpents, and Fire: Images of Kentucky Holiness Believers*. Jackson: University Press of Mississippi.
- Sparks, Elder John. (2001). *The Roots of Appalachian Christianity: The Life & Legacy of Elder Shubal Stearns*. Louisville: The University Press of Kentucky.